

ヨーロッパ・ツアー現地演奏会評(7)

「N響ヨーロッパ公演2020」の中から、2月24日に行われたロンドン公演について、現地メディアによる演奏会評をご紹介します。

MusicOMH

25 February 2020

Barry Creasy

日本放送協会(NHK)交響楽団が首席指揮者パーヴォとともに、この木曜日にロンドンに帰ってきた。そして、心地よい3つの音楽作品を組み合わせ、素晴らしい演奏を繰り広げた。《ハウ・スロー・ザ・ウィンド》は、武満徹が室内オーケストラのために作曲した唯一の作品である。楽器が徐々に増大していく短いフレーズ、「エピソード」の連続からなり、それらはあたかもさまざまな穏やかな和音の池の中で浮かんでいる色とりどりの睡蓮のようであった。魅惑的な7音の上行フレーズが徐々に現れ、各エピソードで楽器法、終わり方や逆行により変形されていく。ドビュッシーやラヴェルといった作曲家の印象派的作品の発展型と言えるだろう。ヤルヴィとオーケストラは作品を完璧なまでに仕上げ、その繊細できらめくテクスチャを熟練と機微をもって表現し、デュナーミクとバランスの注意深いコントロールのおかげで、聴衆は穏やかで優美な音楽の世界にぐっと引き込まれた。

この演奏会の武満による超越的な雰囲気は、ソリストにアルゼンチン出身のチェリスト、ソル・ガベッタを迎えて演奏されたシューマンの《チェロ協奏曲》の冒頭に引き継がれた。彼らによる、シューマンの最も謎めいた作品とも言える本作の演奏は教科書どおりだったとはいえ、ニュアンスに満ちていた。楽章間の移行(シューマンはアタッカで繋げている)は円滑に行われており、楽曲全体は無理のない一貫性が保たれていた。ガベッタの演奏スタイルは、チェリストに与えられるらしい、チェロ協奏曲で過度に情感を体や表情によって示す自由を残念に感じている我々にとってはとても魅力的だ。少し体を傾けたり揺らしたりはするが、鼻息や唸り声はなく、堅実な技量だけがそこにある。音楽とその力量との関係がはっきりわかるような演奏である。第2楽章の密度は完璧に感じ、最終楽章の早いパッセージのアーティキュレーションにみられたさりげない輝きも、ただ楽しさを足すだけだった。小規模なオーケストラであれば、デュナーミクや音色をコントロールするのに苦労はしないのだろうが、ヤルヴィはNHK交響楽団というオーケストラを全体的にバランスの取れた状態に保ち、した

がって、ソリストとのやりとりがあまりにも不均衡になることもなかった。

シューマンは、武満のおぼろげな夢の世界と、ラフマニノフの《交響曲 第2番》のより堅牢に作り上げられたロマンティズムとの間の完璧な架け橋となった。ラフマニノフは常にいい曲を作ってくれる。そしてこの交響曲では自身の感情を頭にし、あらゆる場所に絶妙に美しい旋律素材を配置してくれている。第2楽章の緩徐楽章だけでなく、序奏の主題からすでに切なげだ。スケルツォですら、その中心にヴァイオリンの豊かな旋律があり、最終楽章の慌ただしいトレパークでも豪華なロマンティズムを我々に聴かせてくれる。

この楽曲の秘訣は、この感情の豊かさを甘ったるく感じさせないことであり、対照的な音楽的素材に注意を払うことだろう。ヤルヴィとNHK交響楽団に、この点で失望することはまったくなかった。感傷的なパッセージには必要な息をつく時間を与えてくれつつ、テンポとデュナーミクは徹頭徹尾完全にコントロールされており、この日の堅実な運転のなかでも、熱量を高めるためのスピードの変化は強調されていた。高まった期待が達成されるタイミングは実にぴったりだった。第1楽章の金管楽器は重々しく恐ろしく、スケルツォのフーガは猛スピードで演奏され、最終楽章の冒頭のダイナミックな波のうねりは細心の注意で演奏されており、同楽章の堂々たる旋律の入りの前の「一撃」には驚かされた。離れ業の演奏だった。